

高齢者に配慮した鉄道駅の案内表示：現状のギャップと利便性向上への3つの提言

2037年の超高齢社会を見据え、すべての高齢者が社会参加しやすい駅環境を実現するためには、「案内と広告の分離」と「身体特性に合わせた配置」が不可欠である。

背景とアプローチ



国民の約3人に1人が65歳以上に。社会参加の鍵は「移動のスムーズさ」。

2037年



調査1（現地調査）：
JR奈良駅・近畿奈良駅における案内設備の現状評価。



調査2（ユーザー調査）：
65歳以上の高齢者40名へのアンケートによるニーズ比較。

現状の駅空間における「評価」と「課題」

評価できる点



吊り下げ・路面表示の活用



ピクトグラムと字体の工夫

高齢者の本音とギャップ



- 多言語表記＋広告＋周辺情報が混在し、必要な情報が埋没。
- ICカード等で負担は軽減傾向にあるが、「利用頻度の低い高齢者」ほど、探索時間や視点配分の負担が大きく、改善要望が強い。

これからの駅環境に必要な3つの取り組み



① 掲示位置の多層化

上方の掲示に加え、身体状況に応じた「目線と平行（壁面）」や「路面」への簡潔な表示を拡充する。



② 表示方法の最適化

認識しづらい配色を排除し、色覚特性に配慮したより直感的で簡潔なデザインへ継続的に改善する。



③ 情報の切り分け

物理空間での「情報過多」を防ぐため、広告と案内の配置を分離。詳細な情報はアプリ等（現実空間以外）へ移行し、空間利用を見直す。